

HOPES
ホープス セカンド
2nd

「本当は本校舎に戻りたい気持ちもありました」。伊東さん達3年生は仮設校舎の最後の卒業生。村内再開の時期が検討されていた2年前には、菅野村長を学校に招き、仮設校舎で仲間と一緒に卒業できるようにお願いしたこともある学年です。「本校舎に通えない人がいたら、全員で卒業できなくなってしまうと...」。伊東さんは当時の複雑な思いを

かけがえのない仲間と共に

伊東 琴美さん（関沢）



生徒会長を務めた飯館中学校を、この3月で卒業します。「ふるさと学習」のメディア班の一員として制作した動画が、2月に「日本子ども映画コンクール」で全国表彰されたばかり。※関連記事 P19



村のいい所や村民の元気を伝えようとメディア班が制作した動画の一場面。右が伊東さん。左は高橋ひな子さん。動画はミュージカル仕立てになっていて、2人はオリジナルの歌も歌っています。

振り返ります。それほど大切な仲間だということでしょう。「少人数だからこそ、きずなが強いと思います。お互いの性格もよく分かっているし」。川俣中学校で間借りの小学校生活も経験。突然の環境の変化に大きな不安を抱えた時期も一緒に乗り越えてきた仲間です。学校の村内再開は、準備期間の関係で、伊東さん達の卒業後となりました。中学校では生徒会長も務めました。「それまでにない大役で、自分を成長させることができました。震災前の生徒数だったら、私が生徒会に関わることはなかったかも。震災をきっかけに成長できたこともあるなど感じています」。後輩たちには「本校舎の環境で、今までできなかったことも、全力で楽しんでほしい」とエールを送ります。「これまでこのこと、そして素晴らしい環境で学べることに、感謝の気持ちも持ち続けてほしいです」。

〈編集後記〉

● たくさんの人々の努力と縁があり、ラオス・ドンニヤイ村と村は互いに手を結んできました。復興ありがとうホストタウンの認定、今回のラオス訪問でそのつながりがより大きなものになることでしょう。村が学校建設に手を差し伸べると、震災に遭った時には、ラオスが優しくあたたかい手を差し出してくれました。そもそも、国も、文化も異なるラオス・ドンニヤイ村と日本・飯館村。ひとを想う気持ちは国境を越えるはず。ばらばらの点と点がつながり、二本の線となり、いずれば円となります。東京五輪に向けて、優しさあふれる丸い円をつくりあげていきましょう。(木幡)

● 相農飯館校演劇部の最終公演で部長の菅野千那さんが印象的なことを話しました。「これを演じることはもうできないけれど、観てくださった皆さんが想像をやめない限り、この芝居は続いている」と。本当ですね。劇から受け取ったものを私も大事に持ち続けるつもりです。「学校」もこれに似ています。大切な日々が過ぎ去っても、一つひとつの学びや経験が、その人に寄り添い支えてくれるから...。仮設の学校、幼稚園、保育所のこと、私は絶対に忘れません。(星)



飯館村は「日本で最も美しい村」連合に加盟しています。